岐阜県教育ビジョン検討委員会

高校の在り方専門委員会（第１回） 議事要旨

日　時	平成２５年２月２７日（水）　１０：００～１２：００
場　所	教育委員会室
出席者	＜委員＞　８名（５０音順） 加藤直樹委員（委員長）、髙賀敦子委員、嶋﨑吉弘委員（副委員長）、 島田亜由美委員、髙田大嗣委員、中島潤委員、信田哲彦委員、前谷智香委員 ＜県教育委員会＞ 教育長、教育次長、義務教育総括監、総合教育センター長など

会議の概要
１　開会
２　あいさつ
３　協議事項
（１）第１回岐阜県教育ビジョン検討委員会について
（２）高校教育を取り巻く環境の変化と課題について
（３）高校の在り方専門委員会における検討テーマ（案）について
（４）その他
４　閉会

◆　意見の要旨

【加藤委員長】

○　次期教育ビジョン策定にあたっての中長期的な高校の在り方がテーマになっている。この専門委員会の委員からの意見を反映させていきたい。

【髙賀委員】

○　本県はかつてアパレル産業が盛んであり多くの出口もあったが、現在では学んだことを生かして就職することが大変厳しくなっている。産業界も大きく変わってきている。

【島田委員】

○　岐阜県は中小零細企業が多く、ものづくり関連の企業が多い。若い力が外に出て行くのではなく地域に根付いて地域が繋がって活性化していくお手伝がしたい。

【髙田委員】

○　高校入試における各高校の出願者数には高校の在り方を考えさせられる点が多くある。

○　中学校では、どのような高校が魅力的か、どのような高校に行けば社会に出て行くための力がつくのかを子どもたちにいつも考えさせている。県教育ビジョン策定後５年がたとうとしているが、この５年間は社会の変化も大きく高校の在り方そのものも適切な時期に見直すことが必要と感じている。

【信田委員】

○　採用にあたり大学の新卒者と多く接して感じることは、大学生と企業の求めている人物像とのミスマッチである。

○　特に高学歴といわれる子どもたちの多くが安定志向になっている。また、大学から渡された就職マニュアル通りに行動している者も多いと感じる。

○　新卒者に一番欠けていると感じるのは文章力と論理的思考力である。自分の意志、本当のやるべきことは何かを考える力が不足しているのではないか。

【前谷委員】

○　現在、子どもたちは失敗をおそれてチャレンジしなくなっている傾向にある。反対に小さなチャレンジを経験すると驚くほどよいアイデアを出したり行動したりすることが多く、逆に私たちより力は持っていると感じている。

○　課題に向けて皆で一緒に取り組み、それを乗り越えていく体験をすることが、夢に向かってチャレンジしていくことのキーワードとなる。

※　事務局から資料説明

【加藤委員長】

○　本日は全体の課題であるとか背景になる部分等について、事務局からの資料にもある検討テーマ（案）も参考としながら、各委員の立場からの自由な意見公開を主としながら論点整理ができればと考えている。

【信田委員】

○　検討テーマ（案）として、会社経営の観点からリーダーシップやグローバルな能力の育成に注視したい。

○　最近の子どもたちの安全志向は、自分自身がリーダーにはなりたくなく、誰かの後からついていきたいという志向が増えたということではないか。

○　自己評価の低い子どもたちが増加した背景には家庭環境（経済状況）の影響もあるのではないか。厳しい経済状況の中、保護者も安全志向に走る傾向が強くなってきている。

○　企業側にも課題がある。将来に対して明確なビジョンを掲げて社員を引き付けている経営者が少なくなってきている。目先の対応に追われがちになっているのは事実。

○　リーダーシップを発揮してグローバルな視点をもつことはすばらしいことで、そのような人物を目指した生き方をしないと、人生の大部分を捧げる仕事がつまらないものになってしまう。このような話を経営者から子どもたちに伝え鼓舞するような体験の場が

必要ではないか。このような体験が充実すれば大学に行く目的が明確になる。

○　高校の３年間の目的が大学に行くことだけになっているのではないか。本当に大切なのは大学の４年間が終わった後の何十年も仕事をする期間である。

○　人生のデザイン、働くことや社会人としての生き方のデザインというものが重要であり、このためには幅広い思考力や議論が重要である。

○　最近の子どもたちは、どちらが正しくてどちらが間違っているのかという結論をすぐに求めたがる傾向にある。実はどのようなことにも正しいことと間違っていることが混在していることが多く、仲間同士で意見を戦い合わせながら考え方を洗練していくことができれば、人生について深みをもって考えていくことができるのではないか。

【加藤委員長】

○　社会そのものの価値観というものが多様化している状況のなかで、正解は一つではない。どのような選択をするのかが重要である。

○　少子高齢化の進展や社会経済情勢の変化等、夢を持ちにくい状況ではあるが、この悪条件の中、いかに前向きに物事を考えるのかといったことが重要である。

【島田委員】

○　将来、何をしたいのかということを見据えた上で、高校や大学を選択することの重要性を指し示すことができるような教育が重要であり、高校段階での自立が重要である。

○　最近の就職希望の高校生は、就職の面接等で皆同様の受け答えをすることが多く、与えられたとおりの言葉で皆が同じ返答するため適切な評価ができないことが多い。

○　生徒一人一人の個性や本当の気持ちを引き出すことが重要である。相互に意見を戦い合わせながら見出していく結果として個性や自我が芽生えることもある。

○　現在は、結論を予め提示されてしまうことが多く、その提示された結論に向かって進む傾向がある。

○　物事には一定の結論が常にあるわけではなく、結果としてどのように展開してもよいという考え方を、教える側の立場や経営者等が持っていることが重要である。

【高賀委員】

○　高校では進路指導部を中心に就職の面接指導等を実施している。面接等で生徒が自分の考えをもとに、より主体的な受け答えができるよう、高校における指導の充実を図る必要があると考えている。

○　少子化の影響もあるのか過保護（子どもへの過度の接し方）な保護者が多い。家庭における子どもの自立にも課題があるのではないか。何かにチャレンジする気持ちや不安に立ち向かう姿勢等が弱くなっていると感じている。

○　論理的思考力や自ら課題を見つけ自ら解決する力の不足を実感している。

○　学校外の施設等での実体験を経ると生徒は驚くほど成長する。

【加藤委員長】

○　ここまでの意見から「自立」という言葉がキーワードとなるのではないかと感じた。

○　リーダーシップやグローバルな能力の育成という観点からも、「自立」は重要な要素であり、「自立」した子どもをいかに育てるのかが重要であるのではないか。

○　１月３０日の県教育ビジョン検討委員会（第１回）でも、同様の視点から、最近の子どもたちには「自己肯定感」が欠如しているのではないかといった指摘があったが、高校においてもこの課題どのように対応するのかが問われる時期にきていると感じている。

【髙田委員】

○　中学校ではキャリア教育として、様々な職場体験やいろいろな職業の方から話を聞く場を各学年でもっているが、実際に高校選択をする場合に、より具体的な情報を収集して考えていくことが大切である。

○　本校では、最近では総合学科への出願が増加したように感じている。自分の特色をより発揮できる場を求めた結果ではないか。

○　今後、高校の在り方を考える場合、リーダーシップやグローバルな能力の育成というのは言葉で表すのは簡単であるが、このために高校で具体的にどのような力を育成するのかといった観点からの検討が必要となる。

○　これまでの高校からのアピールといえば、大学の合格者数や部活動の成績・資格取得実績等が多いが、さらに、将来、仕事に就くために身に付けていく力を示す等、具体的なアピールの在り方も、高校の在り方の検討の視点に加えるとよいのではないか。

【加藤委員長】

○　どのような力を身に付けさせるのかというのは大学においても重要な課題である。

○　総合学科等の実態や機能についても、今後の論点としたい。

【嶋崎副委員長】

○　社会人としての自立という観点からは学歴はあまり関係ないと考えている。

○　課題意識を常にもち自ら解決しようとする姿勢のあるものは社会人として伸びていく。また、仕事が人を作るという側面もある。

○　高校段階までに成功体験をしてほしいと考えている。現在は、体験が乏しいことが夢を持てなくなることに繋がっているのではないか。自分を過少評価する結果として夢を持てないでいるのではないか。

○　どのような小さなことでもよいので、やればできるという体験をすることが重要である。与えられた知識ではなく体験をもとにした考え方が重要となる。

○　社員にも自分なりの答えを自分で考えてもってくることが重要であるといっている。その結果として自信をつけてもらいたいと考えている。

○　最近の若者には自信がないため挑戦したがらない傾向があるのではないか。自信をつけさせるためにも、小中高の各成長段階に応じた成功体験は必要である。そうすれば大学に進学して主体的にやりたいことを考えられるようになるのではないか。

【前谷委員】

○　今の子どもたちは与えられた課題を一定の結論に向けて解決する力はあるように感じ

るが、自ら考え課題を解決することについては非常に苦手である。

○　子どもたちは本来、力をもっているものである。自分たちの考えをどのように繋げていけば課題を解決できるのかということについては、周囲の大人が事前に答えを与えてしまう影響もあって苦手である。

○　地域のプロと言わる人物から自分のことを認めてもらえた時に子どもたちは大きく変化する。自信が生じた瞬間、子どもたちはリーダーシップをもって行動することができ、様々な意見を出し、考えて進んでいくことができるようになると感じている。夢を実現した大人や夢にむかって努力している大人との接点が重要となる。

○　岐阜県には他県に比してものづくりの分野において力のある企業が多くある。このような企業ですばらしい体験をした人物に出会い、認めてもらうような機会が増えるとよいのではないか。

○　少し難しいと感じる課題を子どもたちに与えて、その解決のために子どもたち同士で議論し解決していく過程から得られる達成感を与えることが重要であり、子どもたちの前向きな考えにも繋がる。

○　子どもたち同士のディスカッションは極めて重要である。自己主張が重要なのではなく、自分の意見は述べつつも他者の意見も聞き、互いに意見を戦わせ理解しあうことが重要であり、自分と仲間が考えていることを組み合わせながら一つの結論を見出すことは重要である。

【加藤委員長】

○　人生の正解がないだけに、その中でいかにプロセスをもつのかが重要になる。

【中島委員】

○　ＳＳＨ（スーパーサイエンスハイスクール）で学んだことは、科学的なものの見方と自分の考えを表現することの大切さである。

○　「科学的な」とは間違ったデータや噂などではなく、自分でしっかり判断できる姿勢を身につけることであり、「表現する」とは相手に対して自分の持っている考え方を確実に伝える態度を持つことである。

○　具体的にはプレゼンテーション力や英語力、数学力などが重要であり、それは高校だけでは完結しないものである。そのため社会の力や大学の力などが重要であり、高大連携は効果的であった。

○　また、高校の役目として、中学生に高校を見せる中高連携は大切ではないか。さらに市と高校の連携も必要であろう。

○　現在の生徒の多くが自分の発言に自信がなく、発言に自信を持つだけの知識やバックグランドがない。このため、相手の考え方をつかむことができない。高校でしっかり育てていかないと、社会で必要とされているコミュニケーション能力や人間関係力が育たない。

○　高校生は、本来は力を持っていると考えている。たとえば、震災時に避難所で一生懸

命お年寄りの世話をするのは高校生である。地域において高校があると明るくなる。そのような高校の持っている力は実は非常に大きいのではないか。

○　このような力を教育方法や教育制度として関連づけて発揮できるように教育ビジョンを考えていけるとよい。

【加藤委員長】

○　これまでの発言を整理すると自立や夢をどのようにもたせるのかが第一の課題となる。

○　これをどのようなプロセスでどのように進めていけばいいかというときの観点が「対話」、「考えること」、「人と接すること」、「プレゼン」、「問題意識」であり、これらをどう与えるかを考えれば「体験」がキーワードとなる。

○　体験から何をどのように学ぶかとか、それらのことを自信に繋げたりするとかいうことであって、自分の意味を学んで変容が起こってくる。それを進めていく装置としては、制度的なものとしては総合学科もその１つであるのではないか。

【信田委員】

○　最近の子どもたちは、すぐ答えをほしがる。また、答えを知っている気になっている。その結果として社会で通用しないと自分が悪いのではなく通用しない環境が悪いと思いすぐ仕事をやめる。これはインターネット等の膨大な情報で、自分のことを正しいと肯定する情報がいくらでもあることも要因の一つである。

○　何十年も苦労をしてきた人しか成功していない。手軽にネットの情報を組み合わせれば成功できるというような考え方を捨てさせる必要がある。

【加藤委員長】

○　「問う」ことの大切さを訴えて行くことが重要。新しいものはそこから生まれる。

【中島委員】

○　今は知識を知識として学んでいてそれで終わりになっている。知識をさらに体験によって磨き、さらに知らないことが出てきたらまた学ぶというサイクルがあるとよい。これこそがいわゆる進学校のキャリア教育であり、「知のキャリア教育」である。学んでいる知識を社会の中に関連づけさせるような教育方法や教育システムを考えるべきではないか。

【加藤委員長】

○　知識基盤社会はキーワードになっており、知識が大切だという価値があるが、必要なことは、知識は作らないといけないということである。これからはそのようにシフトしていかなければいけない。

○　問いかけを作り問題を解決していくような高校の事例はないか。次回用意してもらえると具体的な話ができる。